

# 藤崎遺跡 16

－藤崎遺跡第34次調査－

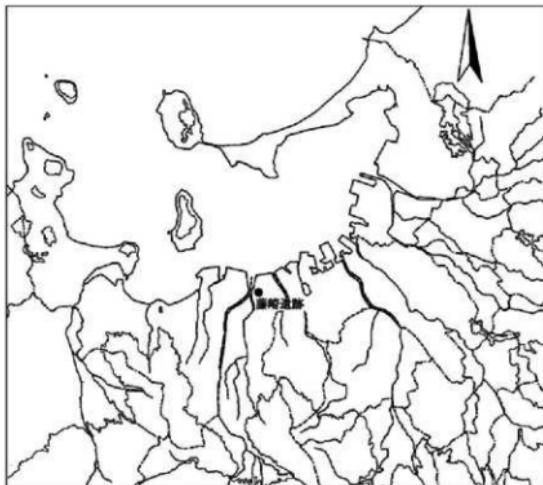
2006

福岡市教育委員会

# 藤崎遺跡16

—藤崎遺跡第34次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第903集



遺跡略号 調査番号  
FUA-34 0461

2006

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。福岡市域の海浜部には博多を中心に大規模な中世遺跡が多数みられます。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、集合住宅建築に伴い調査を実施した藤崎遺跡第34次調査の内容について報告するものです。今回の調査では中世の掘立柱建物・溝を検出するとともに、多数の陶磁器・土器・石器が出土しました。これらは中世における西新・藤崎周辺の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで多くのご協力を賜りました奥村伸一様はじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が集合住宅建築に伴い、福岡市早良区藤崎1-2-36において実施した発掘調査である藤崎遺跡第34次調査の報告書である。
2. 本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
0461	FUA-34	203.9m <sup>2</sup>	2004.11.1～2004.11.30

3. 本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
4. 本書に掲載した遺物実測図は阿部が作成した。
5. 本書に掲載した挿図の製図は阿部が作成した。
6. 本書に掲載した写真は、阿部が撮影した。
7. 本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より6° 40' 西偏する。
8. 遺構の呼称は獨立柱建物をSB、溝をSD、井戸をSE、土壙をSK、ピットをSPと略称する。
9. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。
10. 本書の執筆・編集は阿部が行った。

## 本文目次

第1章はじめに .....	1
1. 調査に至る経過 .....	1
2. 調査組織 .....	1
第2章位置と環境 .....	2
第3章調査の記録 .....	6
1. 調査概要 .....	6
2. 遺構と遺物 .....	6
①掘立柱建物 (SB) .....	6
②溝 (SD) .....	6
③井戸 (SE) .....	8
④土壤 (SK) .....	8
⑤ピット出土の遺物 .....	11
⑥その他の遺物 .....	11
⑦小結 .....	12

## 挿図目次

Fig. 1 藤崎遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000) .....	3
Fig. 2 調査区位置図 (1/8,000) .....	4
Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000) .....	5
Fig. 4 調査区北壁土層断面実測図 (1/60) .....	6
Fig. 5 調査区全体図 (1/100) .....	7
Fig. 6 SB35実測図 (1/60) .....	8
Fig. 7 SB35出土遺物実測図 (1/3) .....	8
Fig. 8 SD07出土遺物実測 (1/3) .....	9
Fig. 9 SE36実測図 (1/40) .....	9
Fig. 10 SK02・10・17・23・24・26・38・39実測図 (1/40) .....	10
Fig. 11 井戸・土壤出土遺物実測図 (1/3・1/1) .....	11
Fig. 12 ピット出土遺物実測図 (1/3) .....	12
Fig. 13 その他の遺物 (1/3) .....	12

## 図 版 目 次

- PL. 1      1. 調査区北半全景（南より）  
              2. 調査区南半全景（東より）  
              3. 調査区南半掘り下げ後全景（東より）
- PL. 2      1. SE36（南より）  
              2. SK10（南より）  
              3. SK17（北より）
- PL. 3      1. SK23（南より）  
              2. SK24（北より）  
              3. SK26（南より）
- PL. 4      1. SK37（東より）  
              2. SK38（東より）  
              3. SD07西壁弥生土器臺出土状況（東より）

## 第1章 はじめに

### 1. 調査に至る経過

2004（平成16）年7月26日付で株式会社福岡潜水 遠藤徹氏より本市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課）宛に早良区藤崎1-2-36における集合住宅建築に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受け埋文課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である藤崎遺跡に含まれていることを確認し、当該地で平成16年8月17日に試掘調査を実施した。この試掘調査においてピット・土塹などの遺構が検出された。この成果を元に両者で協議を行ったところ、建築工事によって遺構の破壊を免れないため、建物部分について本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、2004年11月1日から発掘調査、翌2005年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

### 2. 調査組織

調査委託：奥村伸一

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎純男（前任） 山口譲治（現任）

同課調査第1係長 田中壽夫（前任） 山崎龍雄（現任）

調査庶務：文化財整備課 後藤泰子

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長 濱石哲也

同係主任文化財主事 吉留秀敏

同係文化財主事 本田浩二郎（前任） 松浦一之介（現任）

調査担当：同課調査第1係 阿部泰之

調査作業：田原忠昭 真田弘二 神原堅 野崎賛治 西島マツ子 西嶋ムラ子 西嶋洋子 脇坂

ミサヲ 宮原邦江 山田ヤス子 加島定次郎 高橋茂子

整理作業：窪田謙 黒早苗 松田順子

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで奥村伸一様をはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

## 第2章 位置と環境

現在の行政区では福岡市早良区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯盛山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる平野である。この平野は主に室見川とその支流によって開拓された沖積平野で、現在は北部から幹線道路沿いに市街地化が進んでいるが、旧来広大な水田地帯であった。この沖積平野の北部には博多湾にみられる左転海流によって形成された長大な海成砂丘が伸びている。

藤崎遺跡はこの砂丘上に形成された遺跡である。

藤崎遺跡は、現在の地番では藤崎・百道地区から高取を含む地域に位置する周知の埋蔵文化財包藏地である。文献における遺構・遺物発見の記録は、明治45年に現藤崎1丁目12番地にて出土した三角縁複波文帯蓋龍鏡・素環頭太刀とその出土地点である箱式石棺を報告した大正14年の報告である。戦後福岡市が埋蔵文化財行政に着手して後は、平成17年12月現在に至るまで合計34次に至る発掘調査が実施され、遺跡の内容が徐々に明らかになりつつある。

この藤崎遺跡は、弥生時代から近世にわたる遺構が検出される複合遺跡である。遺物はさらに時期を遡るものが出土地しているが、当該期の遺構は検出されていない。弥生時代には、主に遺跡の北部、現国道202号線沿線において大規模な壇棺墓群が営まれる。いずれも前期末～中期に至るもので、後期に至る壇棺が出土する西新町遺跡とは様相を異にする。

古墳時代には、壇棺墓群が営まれた地域に方形周溝墓群がつくられる。主体部に箱式石棺が用いられるものもみとめられ、第32次調査では銅鏡・鉄刀を出土した箱式石棺に伴う可能性がある方形周溝が検出されている。第9次調査では第2面において方形周溝状の溝が検出されているが、9次調査地点の東に位置する第34次調査地点（本報告）では、古墳時代前期の遺構は検出されなかった。古墳時代後期には竪穴住居・掘立柱建物がつくられ、一定規模の集落が形成されるものと思われる。

古代には第3次調査で土器塗まりが検出されている。各調査区で当該期の遺物は一定数量出土しているが、顯著な遺構は検出されていない。

中世以降で目立つのは多くの溝状遺構である。断面V字形の溝や矩形に屈曲し、内側に柵を巡らせるものが検出されており、13世紀頃のものとされる。防御的機能を考え、元寇に関係する防衛施設の可能性が指摘される一方、井戸・土壙・掘立柱建物との関係を重視し、屋敷地の区画溝としての機能を考える意見もみられる。今回報告する第34次調査においても平行する2条の溝が検出され、屋敷地の区画溝である可能性が考えられる。

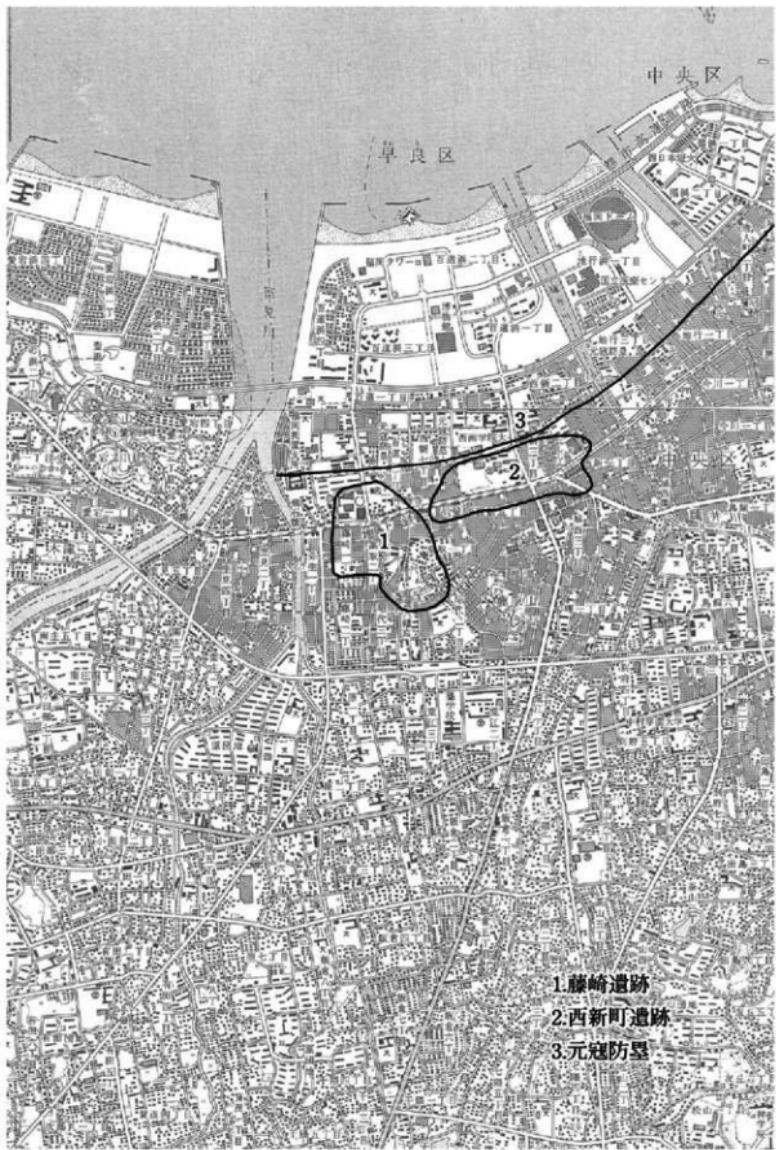


Fig. 1 藤崎遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)



Fig. 2 調査区位置図 (1/8,000)

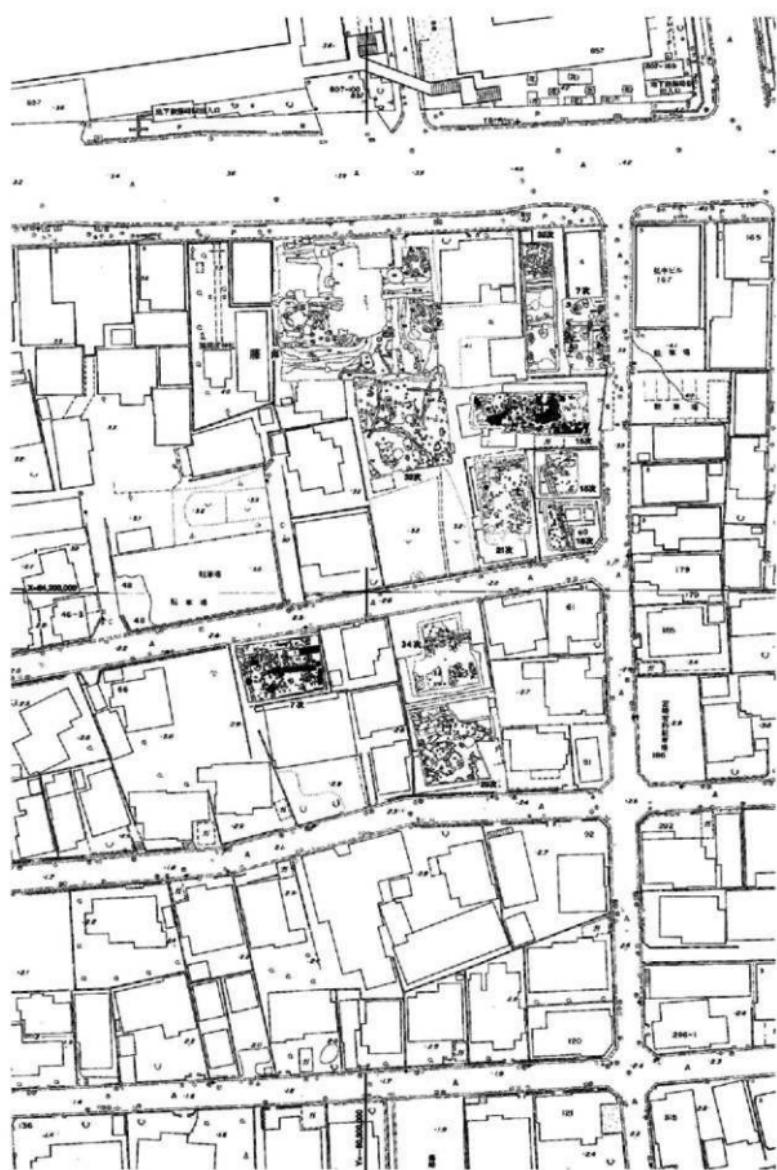


Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)

## 第3章 調査の記録

### 1. 調査概要

今回報告する第34次調査地点は藤崎遺跡の西部に位置し、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出された。遺構は現地表面から-80cm、黄褐色砂層上にて検出した。遺構は検出面の上層である暗褐色土層から掘り込まれるが、遺構検出は困難であったため、基盤の砂層まで掘り下げ、遺構検出を行った。なお調査終了後遺構面をさらに掘り下げ、未検出遺構の有無を確認している。

今回の調査で検出した遺構は、3間×3間の掘立柱建物1棟・溝4条・井戸1基・土壙8基、ピットである。時期は、遺物僅少のため詳細は不明であるが、溝は中世前半、建物・井戸・土壙はそれより新しいと思われる。遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・石錐が出土した。いずれも細片であり、量も少ない。弥生土器は中世の遺物に混じり少數出土する程度である。

### 2. 遺構と遺物

#### ①掘立柱建物 (SB)

SB35 (Fig.6) 調査区北部にて検出した。南隅部を擾乱によって破壊されるが、柱穴の中心同士で桁行方向4.3m、梁行方向3.6mを測る3間×3間の側柱建物であると思われる。長軸を南東-北西方向にとり、溝SD07を切る。柱穴の間隔は中心同士を結ぶと1.1m~1.7mを測り、1.2mがもっとも多い。東梁行方向に柱痕跡を残す柱穴がみられ、柱筋に乗るために暫定的に建物に含めるが、間隔は0.6mと極端に短い。

出土遺物 (Fig.7) 1は、龍泉窯系青磁碗である。口縁部～体部にかけての小片で、内面に飛雲文を施す。2・3・4・5は、土師器環である。いずれの個体も器壁は磨滅する。2は口縁部の小片。3～5は底部の小片で、外底面に回転糸切り痕が観察される。

#### ②溝 (SD)

SD07 (Fig.5) 調査区北部で検出した。SB35に切られる。東西方向に伸びる溝で、磁北にはほぼ直交する。平面プランは凹凸が激しく、幅0.5~1.1mを測る。深さは5~20cmを測り、非常に浅い。底面は平坦である。埋土は上部が暗褐色、下部が黄褐色のいずれも砂質土で、流水の痕跡はない。遺物はおもに上部の暗褐色砂層から出土した。

出土遺物 (Fig.8) 6・7・8は、土師器である。6・7は、环の小片である。外底面に回転糸切り痕を有する。8は、碗である。口縁部から体部にかけての小片である。9は、移動式竈である。上部の破片で、全面にユビナデ調整がみられる。残存高15.3cm、幅15.2cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好である。10は、土錐である。端部を欠損する破片で、器壁は剥落する。残存長5.4cm、外径1.6cmを測

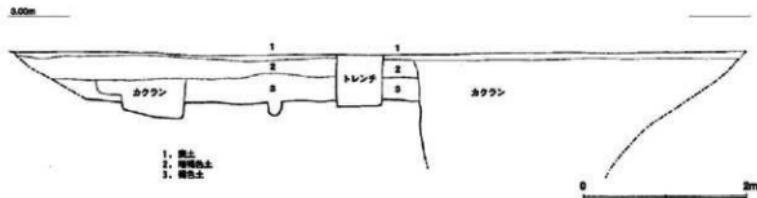


Fig. 4 調査区北壁土層断面実測図 (1/60)

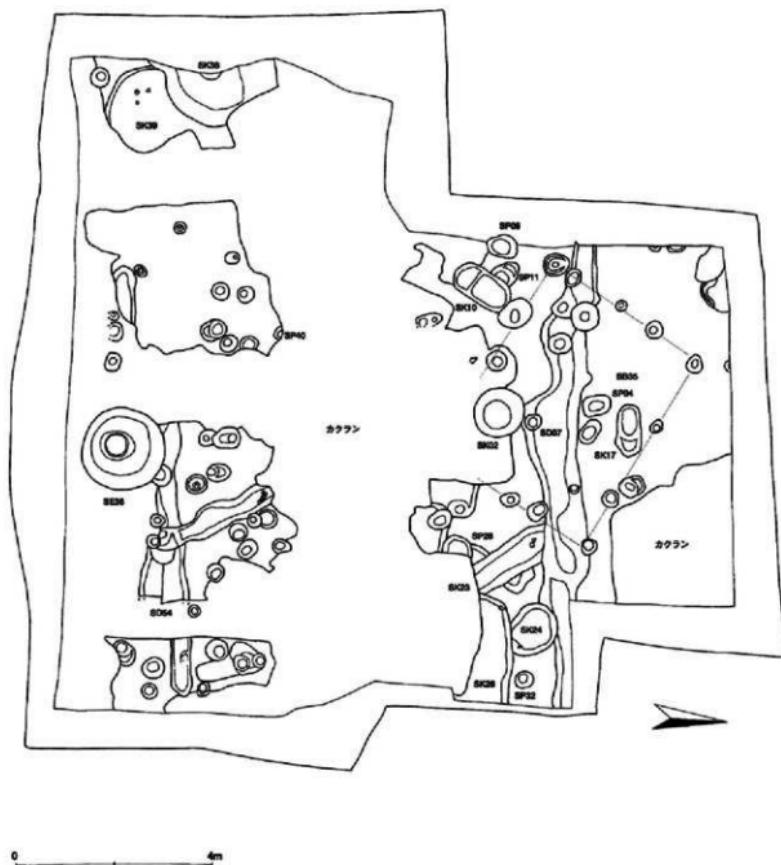


Fig. 5 調査区全体図 (1/100)

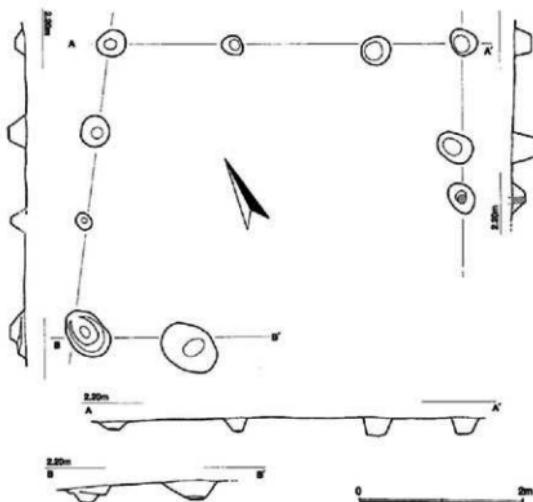


Fig. 6 SB35実測図 (1/60)

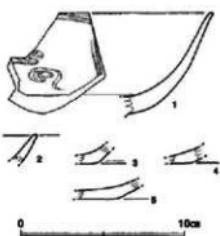


Fig. 7 SB35出土遺物実測図 (1/3)

#### ④土壤 (SK)

SK02 (Fig.10) 調査区北部にて検出した。SD07を切る円形の土壤である。上面の径は1.0m、深さ0.6mを測る。

出土遺物 (Fig.11) 18は、須恵器壊である。底径9.0cmに復元される。19は、土師器壊である。外底面に回転糸切り痕を有する小片である。

SK10 (Fig.10・PL.2-2) 調査区北部にて検出した。SB35に切られる梢円形の土壤である。南部にテラスを有し、長径1.2m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

SK17 (Fig.10・PL.2-3) 調査区北部にて検出した梢円形の土壤である。長軸の方針はSD07に合い、東部にテラスを有する。長径1.1m、短径0.6m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

SK23 (Fig.10・PL.3-1) 調査区北部にて検出した。溝の可能性もあるが暫定的に土壤として報告す

る。11は、穿孔を有する砾である。砂岩質の角砾を用い、上面中央付近に片面から1/4程度の深さまで打撃によって穿孔する。重量425gを測る。

12は、鉄釘である。先端部を欠損する。錆に覆われるが、本体は断面方形で残存長8.5cmを測る。

SD45 (Fig.5) 調査区南部にて検出した。SE36に切られる溝で、SD07とほぼ平行に伸びる。擾乱に大きく破壊され、全体は不明だが、調査区内で終息しているものと思われる。SD07と合わせ、屋敷地の区画をなすものの可能性が考えられる。

**出土遺物 (Fig.8)** 13は、土師器壊である。口縁部の小片である。14は、土錘である。下部を欠損する破片で、残存長3.6cm・外径1.6cmを測る。  
**③井戸 (SE)**  
**SE36 (Fig.9・PL.2-1)** 調査区南端部にて検出した。堀方の平面形は不整な円形で、底面に井側の痕跡と思われる筒状の有機質が高さ0.2m程度残存していた。湧水はみられない。

**出土遺物 (Fig.11)** 15は、白磁である。瓶の口縁部か。16は、無釉陶器である。鉢の口縁部。いずれも小片である。17は鉄釘である。ほぼ完形で長さ3.8cmを測る。

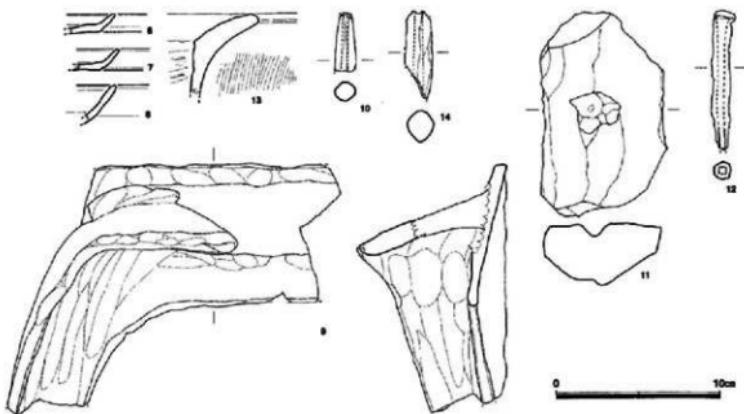


Fig. 8 SD07出土遺物実測図 (1/3)

る。幅0.7m、深さ0.1mを測る。

**出土遺物 (Fig.11)** 20・21は、須恵器坏の小片である。20は高台付坏、21は低いかえりを有する。22は土師器である。小型の壺の小片である。23は打製石鎌である。石材は透明感ある黒曜石である。

**SK24 (Fig.10・PL.3-2)** 調査区北部にて検出した平面円形の土壙である。SD07を切り、SK26に切られる。径1.0m、深さ15cmを測る。

**出土遺物 (Fig.11)** 24は、須恵器蓋の小片である。25・26は、土錘の破片である。いずれも土師質。

**SK26 (Fig.10・PL.3-3)** 調査区北部で検出した。南部を攪乱に切られ全体形は不明。深さ約10cmを測る。

**出土遺物 (Fig.11)** 27は、白磁碗である。口縁部の小片。28は、龍泉窯系青磁である。碗か。体部の小片。29は、移動式窯の底部である。

**SK38 (Fig.10・PL.4-2)** 調査区南部にて検出した。西部は調査区外となるため全体形は不明。土層断面からは南部にテラスを持つ構造であると推定される。深さ0.6mを測る。

**出土遺物 (Fig.11)** 30は、青白磁合子である。蓋の小片。31は、備前系陶器擂鉢である。体部の小片。32・33は、土師器である。32は小皿の

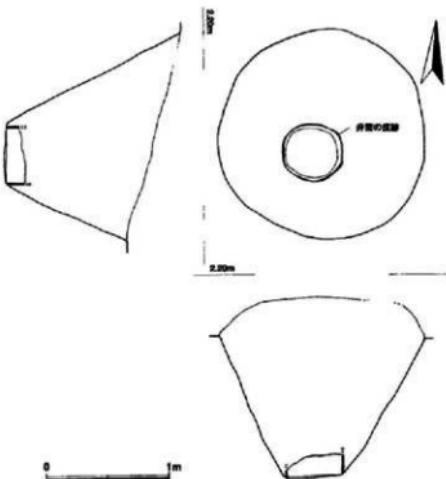


Fig. 9 SE36実測図 (1/40)

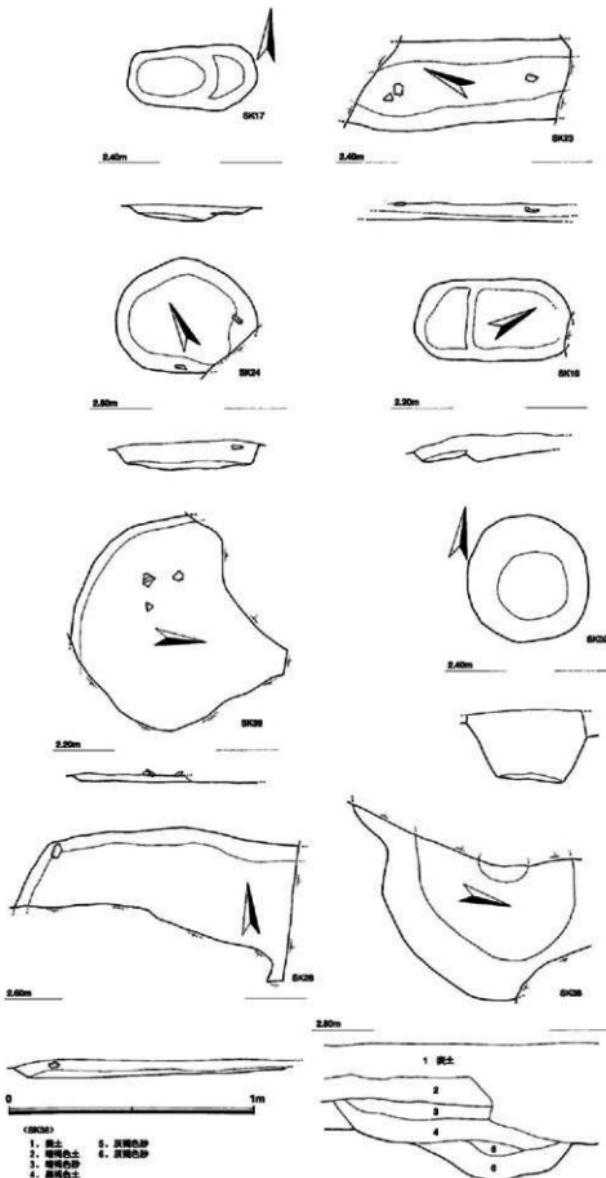


Fig.10 SK02・10・17・23・24・26・38・39実測図 (1/40)

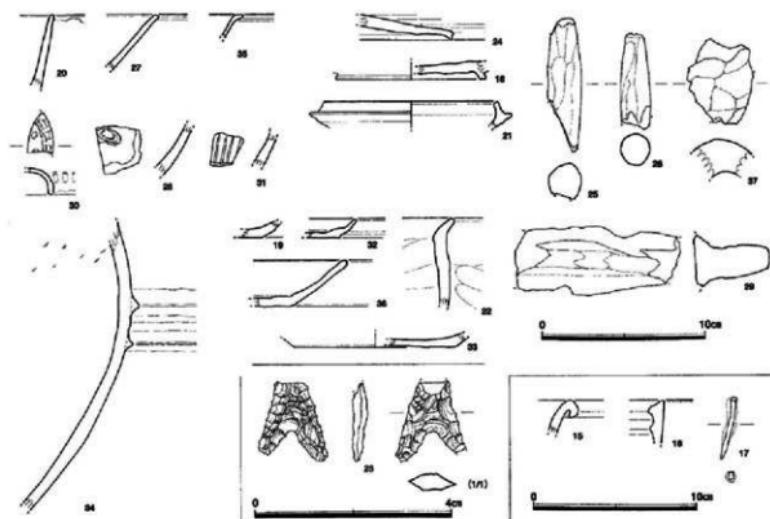


Fig.11 井戸・土壤出土遺物実測図 (1/3・1/1)

小片。33は壺で、底径9.6cmに復元される。外底面に回転糸切り痕・板状圧痕が観察される。

SK39 (Fig.10) 調査区南部にて検出した。東部を擾乱に、北部をSK38に切られ、全体形は不明である。深さ5cm前後と非常に浅い。

出土遺物 (Fig.11) 34は、弥生土器である。壺の胴部で、断面三角形の突帯を2条巡らす。内面上部に爪痕がみられる。

その他、35は白磁碗、36は土師器壺、37は鰐羽口の、いずれも小片である。

#### ⑤ピット出土の遺物

ピットからの遺物の出土量は少ないが、Fig.12に主なものを示す。

(Fig.12) 38は、龍泉窯系青磁皿である。口縁部の小片。SP04出土。39は、SP28出土の白磁碗である。内面に割花文を施す。40は、SP40出土の須恵器壺である。1/4個体残存する破片。41～44は、土師器である。41・43・44は、小皿である。41・44は小片、43はSP09出土で1/4個体残存する破片。42は壺か。SP11出土。口縁部の小片。45は、SP32出土の弥生土器である。壺の小片。

#### ⑥その他の遺物

調査区壁面、擾乱および遺構検出時、遺構面の掘り下げ時にも若干の遺物が出土した。おもな遺物をFig.13に示す。

(Fig.13) 47は、擾乱出土の瓦器碗である。口縁部の小片。48～53は、須恵器である。48は壺身の小片で、遺構面掘り下げ時出土。49は壺の小片である。検出面出土。50は、壺である。小片で調査区壁面から出土した。51は、鉢か。小片で自然釉が全体にかかる。検出面出土。52は、小片のため器種は不明。口縁部から腹部にかけての小片。遺構面掘り下げ時出土。53は、壺の小片である。擾乱出土。54・55は、土師器である。54は壺である。口縁部の小片で、調査区壁面出土。55は小皿の小片である。

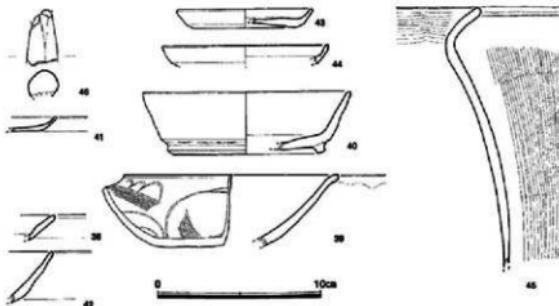


Fig.12 ピット出土遺物実測図 (1/3)

擾乱出土。56は、遺構面掘り下げ時出土である。土師質で口縁部の小片。焼成前穿孔を有する。蜻蛉か。57は、弥生土器である。甕の小片で、口径28.4cmに復元される。58は、鉄釘である。先端部を欠損し断面形は長方形。残存長7.2cmを測る。

9小猪

今回の調査で検出した遺構は、3間×3間の掘立柱建物1棟・溝4条・井戸1基・土壙8基、ピットである。時期は、遺物僅少のため詳細は不明であるが、溝は中世前半、建物・井戸・土壙はそれより新しいと思われる。なお調査区盤面の土層を観察すると、遺構は今回の検出面である黄褐色砂層の上層である暗褐色砂層から掘り込まれている。今回の調査では時間的制約から黄褐色砂層まで掘り下げて調査を実施したが、余裕がある場合は上層の暗褐色土層上で遺構検出を行うべきだろう。

遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・石器が出土した。いずれも細片であり、量も少ない。弥生土器は中世の遺物に混じり少數出土する程度である。この結果から、弥生時代の遺構、特に壇棺については調査地点までは伸びないと思われる。また調査地の西30mで第9次調査が実施されているがこの際第2面の調査で方形周溝遺構が検出されている。今回の調査においても9次調査の成果をふまえ精査を行ったが、これに類する遺構は検出されなかった。

今回の調査では、中世と思われる建物・溝・土壌が検出された。溝は2条平行するものが認められ、周辺の調査例とあわせ12~13世紀代の区割溝に關わる遺構と思われる。溝には弥生土器壺の大型破片が流れ込んでいた。PL4-3に状況写真を掲載している。建物・井戸はこれを切り、なおかつ主軸方位を異にしている。区割溝は短期間で埋没し、新たに区割が行われたものと考えられる。

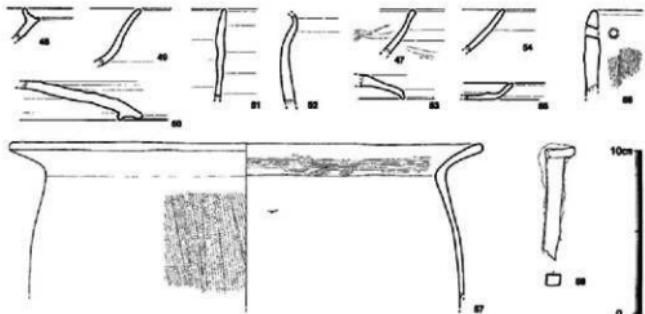


Fig.13 その他の遺物 (1/3)

図 版

P L A T E S



1. 調査区北半全景（南より）



2. 調査区南半全景（東より）



3. 調査区南半掘り下げ後全景（東より）

PL. 2



1. SE36 (南より)



2. SK10 (南より)



3. SK17 (北より)



1. SK23 (南より)



2. SK24 (北より)

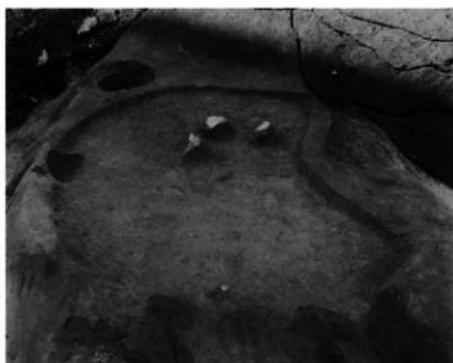


3. SK26 (南より)

PL. 4



1. SK37 (東より)



2. SK38 (東より)



3. SD07西壁弥生土器甕出土状況 (東より)

## 報告書抄録

ふりがな	ふじさきいせき				
書名	藤崎遺跡 16				
副書名	藤崎遺跡第34次調査				
卷次	16				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	903				
編著者名	阿部 泰之				
編集機関	福岡市教育委員会				
所在地	福岡市中央天神1-8-1				
発行年月日	2006年3月31日				
調査期間	2004年11月1日～2004年11月30日				
調査面積	203.9m <sup>2</sup>				
調査原因	集合住宅建築				
ふりがな	ふりがな	コード			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経
ふじさきいせき 藤崎遺跡	福岡県福岡市 早良区藤崎1-2-36	40135		33° 34' 49"	130° 20' 52"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤崎遺跡	集落	古代／中世	中世／掘立柱建物+土塙+溝	弥生土器+土師器+陶磁器	中世の屋敷地と推測される

### 藤崎遺跡 16

福岡市埋蔵文化財調査報告書第903集

平成18年3月31日

**発行** 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神1丁目8番1号  
**印刷** 昭和印刷(有)  
 福岡市中央区草香江1丁目8番10号